

でめざましい活躍をみせた。かれら開拓者の伝統は現代においても交通事故、悪性腫瘍、糖尿病等による四肢切断者のQOL向上に貢献している。しかし先天性四肢欠損症をはじめとする未開拓の分野も多く残され、さらに一層の発展が求められる。とくに義手・義足の研究は、将来の介護ロボットへの展望が期待できる前途洋々たる領域である。著者も四肢切断者の今後のリハビリテーション体制の整備と社会的な意識改革を呼びかけている。

各章に掲げられた資料と文献は豊富で、必要なものについては概要も記され読者に親切な配慮がなされている。欲をいえば年表と索引がついてるとよかったが、そのことは本書の価値をいささかも瑕つけるものではない。義手義足をはじめ補装具に関わる全ての人にとって必読のテキストであるばかりでなく、広く医療・福祉に関心をもつ方々に座右の書として推薦したい。

(篠田 達明)

(風間書房、東京都千代田区神田神保町一―三四、電話〇三―三二九一―五七二九、二〇〇二年二月十五日、A五判、二二六頁、定価本体八五〇〇円)

杉立 義一 著

『お産の歴史』

杉立義一博士がこのたび『お産の歴史』を上梓された。一般向けの新書判二三七頁は大著とはいえないが、八十路に届こうとする著者の、我国のお産の歴史に対する幅広い見解と、衰えを見せぬ知識の集積を平易に説かれたものである。

専門家によるこの種の本が、梶完次『明治前日本産婦人科史』以後半世紀も絶無であったこの国で、産婦人科医、助産婦はいうまでもなく、広く医史、民俗、女性史等に関心をもつ人にも歓迎されると思われる。評者自身四十年近くいくつかの助産師学校で助産史を講じてきたが、従来の教科書の記述には難点のあるものがあつた。現在「助産学概論」のカリキュラムの中で行われている「助産の変遷」の、信頼できる参考書として今後役立つであろう。本書によってこれまで内容がよくつかめなかつた事柄も、多数の貴重な図版と相俟って、理解が深められると期待される。

著者はヒトとサルの出産から始め、縄文・弥生、古墳、飛鳥・奈良、平安、鎌倉・室町・戦国、織豊、江戸時代と区分し、近代、現代にも及んで、その間産科習俗について該博な知識を提供している。この区分については評者も同感であり、象、ライオン、霊長類の助産は比較産科学的にみて意義がある。縄文の妊娠土偶、分娩土偶は原始芸術的にも素晴らしいが、これらに触れてから有史時代に進むわけである。

著者は医史の宝庫ともいべき京都に多年住み、『京都の医学史』『医心方伝来の』『賀川玄悦と賀川流産科』の著書もある。この本では医心方に九頁を費しているが、特に三〇頁に及ぶ、京都を中心とした賀川流産科への記述には、著者の熱い思いが感じられる。また賀川流批判派にも頁を割き、パランスがとれているのは幸であった。

日本では明治初年漢方医学から西洋医学に転換したことを受け、助産術についても西洋助産術の教育を受けた新産婆の活躍があった。従って現在行われている助産技術は伝統的な西洋のその延長線上にある。会陰保護法にしても、二千年前のソラノス以来の伝統に裏付けられている。この意味で助産教育は西洋助産史から入るべきだと思うが、助産技術だけがすべてではなく、現代産科臨床でも日常行われる子宮収縮薬、鎮痛薬、止血薬等による内科的助産術もまた重要である。評者は賀川流より前に存在して一派をなした三位法眼家なつかしい—半井家なつかしい、槽尾流なつかしい—乗付流なつかしい、中条流等なつかしいに関心を抱いている。これら諸流の方薬は中国産科の系列に属するが、我国における当時の秩序の中で、各流が秘方としたものがあり、これらも含めて現在からみれば低水準といわざるをえないけれども、それが専門家によって一般臨床に用いられていた事実は無視すべきでないと考える。

最後に通読して気付いた点を一、二書かせて頂くこととする。著者は一六二頁の記述で山辺文伯が『産育編』で引用した諸厄利亜インギリス(アンゲリヤ)の双鉸図はスメリーの産科鉗子で、

「偏鉸図はバルフィンの鉗子だろうか」と疑問を投げかけている。これは佐伯理一郎—阿知波五郎説を顧慮された結果とと思うが、両図は Smellie: A Set of Anatomical Tables (一七五四)の第三七図そのものである。偏鉸図はスメリーの直短鉗子の左葉の側面図で、実物を知らぬ文伯の不正確な模写図が別の鉗子と誤解されたものである。最近頂いた著者からの私信でもこれを確認しておられる。なお自筆校正本では、両方とも双鉸図となっている。双鉸図の右横の鉤(crotchet)と刀(curved knife)は、図が逆になっているが、これと非常によく似た図がGuillemeau, J.: Childbirth, or the Happie Deliverie of Women, London, Hatfield (一六一二)に見られることを最近知った。

次に「(嫡系)賀川家門籍」の一八〇二年満定の代に入門したとある「中津家中、山辺文伯、二十四歳」(一七七九年出生となる)は、文伯の『産育編』(一七七二)と年代が合わず、「今後の検討を待ちたい」とされている(一六二頁)。「産育編」の著者篤雅あつまさ文伯は中津医官であり、一七六四年九月に上洛して賀川玄悦から療術の盡くを口授され、『賀川口伝覚書』を残している。評者は、門籍の文伯は文伯を襲名した篤雅の嫡男とみている。それで話は片付くが、両者の混同は佐伯理一郎『日本女科史』、緒方正清『日本産科学史』に始まっている。

なお女医おんないについては、医疾令の原文(四四頁図)に「官戸婢」の中から選抜したとあるが、これを、「官戸の婢」(富士

川游『日本医学史』と読むか、「官戸と(官)婢」(服部敏良『奈良時代医学史の研究』)と読むか、二通りあることを著者より教示された。律令制下で官戸、そして(官奴)婢は更に官戸の下に置かれた賤民の一つであり、官戸の婢では意味をなさなくなる。最近は後者が定説のようである(日本史大事典)。

以上余分なことにまで立ち入り、不遜に亘った点をお詫びしたい。

本書は「縄文時代から現代までの一貫した通史」としてよくまとめられた、まさにこの著者により、出るべくして出た好著である。

(石原 力)

〔集英社、東京都千代田区二ツ橋二一五—一〇、電話〇三—三二三〇—六三九三、平成十四年四月二二日、新書判、二三七頁、定価本体七二〇円〕

杉本つとむ 著

『江戸の阿蘭陀流医師』

二十一世紀を迎えて、オランダ語を学ぶ人の数はどのくらい居られるか。またその中の医師の数は、となると微々たるものであろうと考える。日頃、オランダ語に悩まされている医師の一人として、杉本つとむ先生の著作は『解体新書の

時代』の他に何があったかと思うことがある。と申すのも筆者は杉本先生を語学の先生と理解しているからである。

『解体新書の時代』の中に、「甲寅来貢西客対話」を紹介しておられるが、当時の蘭学者が甲比丹一行に会いに、宿舎の長崎屋へ出向くための許可手続きが載せられ、解説されて読者は初めてその複雑さに驚くのである。この手続きはオランダ学にとって些細な一事であるが、これが入口となつて語学、医薬の技術、西洋医学の思想が展開していくのであるから、当然新著の『江戸の阿蘭陀流医師』にこの「対話」が載っていると思つたが、残念なことにカットされたようである。これはちょっと気掛りな点に思えた。

本書は、客観的に、実証的に、万人に納得できる〈近代日本医学〉の源流の真の姿を描きたいと、次の課題について長崎、江戸、京阪、東京への流れを追っている。以下、目次よりひろつてみる。

序説——翻訳と実証

I、大槻玄沢とその医学思想

一、大槻玄沢と『重訂解体新書』

二、『瘍医新書』と西洋医学思想

II、東西の〈本草学〉と〈薬学・医学〉

一、本草学と薬学

二、化学と医学

III、日本近代医学の源流

一、長崎通詞とオランダ医学の導入